

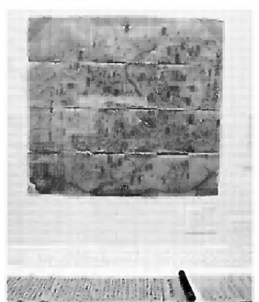
江戸期 家格高めた偽文書

「椿井文書」企画展、系図など40点

江戸時代に近畿一円に流布した偽文書として近年、注目を集めている「椿井文書」。その特徴や、偽文書が広がった背景に迫る展示「椿井文書をめぐる人々」が大阪府富田林市の大阪大谷大学博物館で開かれている＝写真＝。

日本中世・近世史が専門の馬部隆弘・中京大教授（前・大阪大谷大准教授）が2020年に『椿井文書』（中公新書）を刊行し、中世に作成された体裁を取る偽文書が、現代まで影響を与えている実態が大きな話題となった。展示では、古文書や絵図、系図など約40点の椿井文書を初めて一堂に紹介する。

作者の椿井政隆（1770～1837年）の意図がうかがえるのが興福寺関連の偽文書だ。大和（奈良県）の興福寺が近江など周辺国に抱えた末寺を誇張して絵図を描く。興福寺に仕えた中世の椿井家の活躍を強調する狙いがあったらしい。



馬部さんは「江戸時代は由緒語りの時代。家格を高めるための証拠として偽文書の需要があった」と語る。有力百姓らは、祖先が武士だったという偽の由緒を記した系図製作を依頼し、政隆はその期待に応えた。

江戸時代も偽文書の作成は罪にあたることもある。筆跡や用紙を変え、同一人物が作成したと思われない工夫を凝らす。ある家系図は「俊秋」という人物の父を「俊夏」、その父を「俊春」とするなど、「戯れで作った」と言い逃れできるような構成になっている。

足利義満の名をかたった「知行宛行状」は、本来、天皇の意思を伝える繪旨に用いられる和紙に記されている。このように偽作が明らかかな史料もあるが、多くは「史料批判」が不十分で、地域の歴史を伝える古文書として自治体史などに活用されてきた。多彩な絵図や緻密な文書からにじみ出る政隆の「異才」。歴史学がどう向き合っていくのか、課題も問いかける。6月19日まで。

（大阪文化部 多可政史）